

ウラガミでの戯言

No. 7 2004. 11. 30

高教組環境を考える会

文責 分会長 道端剛樹

小規模校に求められるもの

「卒業後の出口も大事だが、それまでの経過が大切。先生と生徒との対話の積み重ねが、将来人生でつまづいた時の人生の糧になる。」(Aさん)

「三年間将来について考えさせる時間として古平高校の価値がある。問題行動の少なさはまさにトータルバランスの良さをあらわしている。それが古平高校が存在する意義ではないか。」(Oさん)

「古平高校では本当によく一人一人を見てくれています。小樽の高校に通っている子どもからは高校の先生からは何も言われないとよく聞きます。現代の子に特有の発達の幼さを取り戻す上でも、高校でも先生方が声をかけることが大事ではないでしょうか。学校が楽しいと言って家を出ていくことが何よりも保護者としては安心です。」(Hさん)

校長から、「他の地域から出口のアピールが大事だという指摘があったがどう思いますか？」という質問に対する学校評議委員の三名の方の意見だ。

近年の学力低下。そして倍率の低さによる低学力生徒の入学。

「いったいどんな授業をしたらいいんだ。」「言葉もわからないのにどうやって説明するんだ。」「問題も読めないのにどうやってテストをやるんだ」「競争力もなくってどうやってこの厳しい世の中生きていくんだ」「親は全部学校に任せっきりでまるで保育所にでも通わせている感覚だ」

小規模校には特有の様々な悩みがあります。そんな中からわき上がる無力感、失望感はい言い尽くせないものがあります。でも、昨日の会での話は本当に聞いていてすがすがしい気分になりました。なかなか結果として、成果として評価されにくい部分を地域の人達はしっかり見ていてくれる。そういった地味な実践をしっかり評価してくれている。そう感じることでできた2時間でした。思えばこれまでも「30人以下学級実現の署名運動」の中でそんな力をもらってきました。へとへとになっても街の一軒一軒を回り、署名をもらう。そんな中で街の人との教育に対する対話があり、同じように元気をもらってきましたような気がします。

「わかっていること（中学校で習ったこと）をまた教えられるのはどうにかならないかと子どもから相談を受けたが、先生方の授業に対する工夫や努力に本当に感謝しているし、そんな（授業の）3年間を過ごすことが人生の糧になるので頑張りたい。」(Aさん)

「古平高校の評価は何よりも口コミで広がっていきます。今いる子どもが『いいよ』と言える学校がいいですね」(Hさん)

という言葉に小規模校の価値を感じ、そして古平高校のあり方、我々の教育実践のあり方を考えさせられました。街の人は見かけ倒しの教育改革は求めているんだと…。